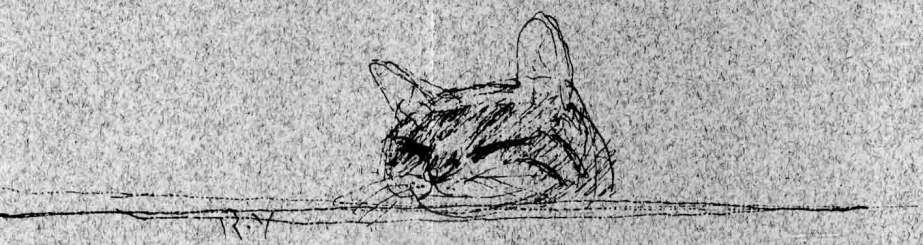
# 黄色い猫

吉行理恵

新潮社

# 黄色い猫



吉行理恵

新潮社

黄色い猫

一九八九年六月二〇日　発行
一九九〇年一月一〇日　七刷

著　者　吉行理恵
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一
振替東京四―八〇八
印刷　株式会社光邦
製本　大口製本株式会社

© Rie Yoshiyuki 1989,
Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-324403-8　C0093

作品集●黄色い猫●目次

灰色のワルツ　7
廃屋の姫君　37
花の鏡　93

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

黒衣の母　127
黄色い猫　149

装幀・挿絵　山城隆一

# 黄色い猫

# 灰色のワルツ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

# 一

「ね、が、う」

幼い子の声がして、坂の途中で私は立ち止った。灰色の小さなビルが在った場所を通りかかったときである。そのビルは解体され、瓦礫が山積みされている。誰もいない。廃墟から薄黒い毛の痩せ衰えた猫が這い出してきた。

「あなただったの……随分年寄りなのね」

と思わず私は呟く。猫はすこし離れて、そっと私を見ている。衰弱していまにも倒れそうな様子だ。引っ越しのとき飼い主に捨てられたのだろうか。あるいは、死場所を探してどこかから辿り着いたのかもしれない。最後の力をふりしぼって鳴いたら、偶々「願う」と聞こえたのだと思う。私は行き過ぎてしまうことが出来なかった。

壊されたビルに興味があったことも、猫にかかずらうきっかけになったのだろう。……かなり前に首吊りがあったらしいが、詳しいことは知らない。棲むと不吉なことが起こりそうな建物だった。

ビルの一階には品の良い喫茶店があったが、いつの間にか飲み屋に変り、入口の鉢植も壁に這わせた蔦も造り物だった。秋には、緑の蔦を赤や黄に取り替えた。

「一緒に来る」

と猫に訊ねると、よろよろと危かしい足取りで二、三歩近づいた。籠を持って買い物に行く途中だったので、猫を入れて家に戻ることにした。軀が大きすぎてだいぶ籠からはみ出している。小刻みに震えているが、逃げ出す気配はない。

いま私は両親が遺してくれた一軒家に棲んでいるが、最近迄古びたビルの部屋を借りていた。ビルでは猫を飼うことを禁じられていた。猫に会ったのが引っ越した後でよかった。そのビルと、猫が這い出してきた場所に在ったビルは同じ町内に建っていて、感じが似ていた。

両親が遺してくれた家を人に貸して得る家賃だけしか収入がなかったから、二十代の半ばから十数年、そのビルの日の光が入らない湿気の多い部屋で、老後のために切り詰めて暮した。付近に年々増え続けるマンション建築、地下鉄工事の騒音のせいで、ノイローゼになりそうだった。二ヵ月程前にちょうど家を貸した人が出ていったので、私は懐かしい家に戻ってきた。

ビルと同じ町内なのに、家の辺りは騒音がすくない。多少貯えが出来たから戻ってこれたが、私の描く絵は売れないから、永くはここにいられないだろう。

庭の樹に鳥が来る。ビル暮しの間は、幼い頃の庭の印象、特に樹と鳥を描いた。

町内に泉鏡花の住居跡があり、白い桜が咲く。幹は銀色に見える。鏡花はそこに在った借家に明治四十三年から三十年間棲んだ。それ以前に鏡花が一年だけ棲んだ家も近くだったそうだが、所在地は分らない。その家は畳にきのこが生えるような湿気だったという。もしかしたら、ビルが建っている土地に在ったのかもしれない。

## 二

亡くなった母が猫好きで、家にはいつも猫がいた。

久しぶりに猫との生活が始まった。今までは母の猫という気持で遠くから眺めていたせいか特別な感じは持たなかったが、これからは自分一人で一緒に暮すので、責任を持って世話をしなければならない。

姉の栄子の友だちに猫好きがいて、その人の紹介で、〝名医〟と評判の医者が往診に来てくれた。猫は肝臓と腎臓の病気に罹っていて、数日遅かったら助からなかった。カンフルや葡萄糖の注射を打ってもらった。カルテに猫の名前を記すとき、まだつけていないので、咄嗟に浮かんだ「とん子」と書き、変えるかもしれないと言っておいた。愛読書「吾輩は猫である」に出てくる姉妹は、とん子とすん子、高名な猫には「まだ名前がない」。その猫は足の爪の黒い福猫だったそうだが、私は貧相な猫を拾ってきた。

「この猫はたぶん十三歳くらいでしょう。人間年齢に換算すれば百歳に近いお婆さんです。でも十五までは生きます」

と医者は言った。

九月に猫を拾って以来、猫の看病に明け暮れている。ベッドを猫に譲り、自分は布団を敷いて寝るようになった。「付き添いみたいね」と栄子は笑った。

毎年十一月に、私は栄子と一緒に東京から二時間程列車に乗って、友だちの静を訪ねていたのに、今年は猫の看病のため行かれなかった。

静は七十八歳。五年前の十一月に夫を亡くした静は東京から長女の嫁ぎ先の離れに引っ越した。山に囲まれた市に、こぢんまりした静の家がある。

静の次女は十年前に事故死した。次女と栄子は同い年で親しい友だちだった。二十年程前、次女はバーに勤めながら新劇の研究所に通っていた。彼女に何度か肖像画のモデルになってもらったが、当時は静に会ったことがなかった。

次女は外の明るい空気を全部身につけて入ってきた。家の中に自然の光を誘い込む……。彼女はキュートで美しかった。

その後私はビルに引っ越して、彼女と会う機会がなかった。突然栄子から事故死したと聞いた。

娘を亡くした老夫婦を慰めに栄子は度々行くうちに私を誘った。それ以来私は静と友だちになった。

泉鏡花の「春昼後刻」にある「風が立つと時々波が荒れるやうに、誰でも一寸々々は狂気だけれど、直ぐ、凪ぎになつて、のたり〳〵かなで済む。もしそれが静まらないと、浮世の波に乗つかつてる我々、ふら〳〵と脳が揺れる」。ときどき私は人と話していると不安になってきて、怖くなる。静は安心していられる数すくない他人である。「貴女はノイローゼにならないわ」と静が言ったとき、私はびっくりして静を見たが、心にもないことを言う人の表情ではなかった。静の前で私は取り乱して声がうわずったりしたことがないので、静に会いたくなるのかもしれない。

行かれなかった私に静から手紙が届いた。

「今年のおちばです　来年は又　新しい　めをふくでせう　会へなかつたのは　残念ですけど　しをりにでもして下さい」と、ケーキに添える薄いナプキンにマジックで大きな字が描いてある。達筆ではないけれど感じの良い字だと思う。赤や黄のきれいな木の葉とカラー写真も入っている。笹に囲まれた小さな庭に、五尺足らずの華奢な静が、すこしはにかんで立っている。静は何時間も庭の花や野菜の世話をするので、皺だらけの可愛い顔が日焼けして茶色い。

## 三

看病のため海にも行けなかった。海辺の夕方が好きだ。風のない冬の日、雲はゆっくりとかたちを変えるので、絵を観ているように落ち着く。視界をざわめきながら鳥が横切ると一瞬不思議な気持になる。

春になり猫は病気が治ると太って元気そうになった。若返ってきれいになったと医者は猫を褒め、丈夫な体質だから、十五歳以上生きるかもしれないと言った。私が絵を描いていると、すこし離れた場所から静かに見守っている。しかめっ面の表情は消え、明るくなった。ムンクの「室内」の片隅にいる猫に雰囲気が似ている。

「まるい笑顔がそっくりよ。ムンクという名前のほうがよかったかしら」

と話しかけると、邪気のない薄い緑の目を向けている。

「まる顔だからムーンも似合うわ」

猫はいまにも吹き出しそうになる。

「元気になったのだから、庭で遊んだら」

硝子戸を開けても出てゆかない。抱いて出したら、私の傍をすっとんで通り越し部屋に戻り、怒った目をしている。おせっかいと言っているのか……。

内緒でビルに飼われていたので、出歩く習慣がなかったのだと想像した。それとも、この



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo